

16世紀から昭和初期までのポルトガル人の日本観

ジョルジュ = ディアス
住 江 淳 司 訳

16世紀の日本においてポルトガルは、西洋文化の紹介者であった。大航海時代、西洋文化と東洋文化を結ぶ道を見つけ、その出会いの場をつくったのもポルトガルであった。

ポルトガル人がいつ日本に來航したかについては、様々な異論がある。歴史的に有力で根拠のあるのは、1542年、1543年の両説である。また、種子島に最初に漂着したポルトガル人たちの名前もはっきりしていない。ある説ではアントニオ・ダ・モタが挙げられている。

『遍歴記』の中で、メンデス・ピントは、自分が最初に日本に到着したポルトガル人である、と断言している。これに対し、シュールハンメル、チャールズ・ボクサー両歴史学者は、ピントの日本來航の優先説を否定して、ピントが1544年日本にいたに違いないことだけは承認している。

日本側資料『鉄炮記』には、1543年9月23日と記され、ピントが上陸した海岸として西之村が挙げられ、今日そこには、ポルトガル人の日本來航記念碑がたてられている。日本の作家たちも、ほとんど全員一致で1543年説をとっている。

日本に関する最初の広範な報告書は、ジョルジュ・アルヴァレスのもので、彼は1544年、ピントに同行して來日した。アルヴァレスはその報告書を1547年12月に作成している。日本の国土と日本人に関する、西洋人の最初の生の報告書である。

アルヴァレスは九州にいた。そこで彼は、日本の風光美を賞揚し、地震や日本を荒しまわっていた台風のことを述べ、木々の青さや果実や草花の豊かさを記録している。また、日本人の毎日の入浴や結髪の習慣について述べた。武士の慣習と物の考え方にふれて、彼らはきわめて高慢で、名誉を重んじ、刀や弓矢を使用することや礼儀正しく、勇敢で、さかんな知的好奇心をもつことを書いている。日本料理については、日本人が米と野菜を常食としていたり、豆腐について記し、肉類の摂取不足を指摘している。また、日本人は床に座り、箸を使っていることを観察している。仏教の影響と僧侶についても言及している。日本女性の美しさを絶賛し、日本人の間では、礼儀作法がきびしく要求されている、と述べている。日本人に関するアルヴァレスの印象は非常に好意的であるが、この点、他の大部分のポルトガル人とは意見を異にしている。つまり、こうしたポルトガル人たちは、日本人は好戦的な国民で、甚だ名誉を重んじると見ているからである。

1549年、鹿児島でフランシスコ・ザビエルは同様のことを述べている。「日本人は非常に高い知性と文化を兼ね備え、質素で自尊心が強く、礼儀を重んじる国民である。」と。このザビエルの意見は、ポルトガルでは一般的な意見であった。また、ポルトガル貴族と武士の道德感には類似点があった。それはザビエルの『日本人の行儀作法』によれば、名誉は命よりも尊ばれる、ということであり、この点で両国民には類似点がある。

19世紀の異国情緒の遍歴者フェルナン・メンデス・ピントは、1542年と1556年の間に4度も日本へ航海している。そして日本文化についての記述も残し、日本人は武士道の精神、礼儀、名誉を重んじる

ことを強調している。また、京都の華麗な情景に触れ、「ついに、日本諸藩の中心の大都に到着した。」と記している。

彼の英雄伝的冒険旅行記『遍歴記』の有名な章には、ピントが種子島に到着した時の模様が記されている。「ポルトガル人たちは、釣りや狩りをし、寺院を訪れて、僧侶らにもてなされた。ポルトガル人のひとり、ディオゴ・ゼイモトは沼地でかもを撃つ際、火縄銃を用いた。すると日本人らはとても驚いた。今まで火縄銃というのを見たことがなかったからである。」

ゼイモトは、その地の大名に一挺を贈った。この大名は、ゼイモトに火薬の製造法と火縄銃の使用法を教えてくれるように頼んだ。後日、ポルトガル人たちが日本にもどってきた時には、日本人たちはもう何挺もの鉄砲を製造していた。1556年には、日本中に何千挺もの銃が存在していた。

宣教師らは、日本語と日本文化に非常に興味を示した。

ジョアン・ロドリゲス(1561-1634年)は、日本初の文法書を書き、『日本語辞典』を編纂した。『日本教会史』では、日本の地理、慣習、文化を知る必要性を説いている。ロドリゲスは、日本画、漆器、扇子、日本人の知力と心理について記述し、酒の常飲に興味を示した。また、茶道と、それが確立されるもとなった哲学を紹介した。

京都に関しては、宴、礼儀作法を記し、京都近郊の美しさや、その庭園、木々について描写している。日本語の優雅さ、詩のたしなみ、大寺院や宮殿、公衆浴場のことも記録している。京都、奈良、安土に関する記述には、色彩、生活の美しさ、異国情緒がある。ロドリゲスの『日本教会史』は社会学的文献としても重要である。人間性の理解と寛大さを啓示しているからである。

ルイス・フロイス(1532-1597年)は、『日本史』で神道と仏教を研究している。また、信長との出会いについても記述している。信長は中背でやせていて、「戦略にたけた男」であった。

信長の情熱は、茶道、馬術、武器、狩りに向けられていた。フロイスは1569年4月、京都で信長と会っている。

1585年、フロイスはヨーロッパと日本の文化の矛盾と相違に関する『日本覚書』を執筆した。フロイスは、この書で二つの地域(ヨーロッパと日本)の人々の外観には、風習上のいくつかの対照すべき相違点があり、それをごく簡潔に要約して述べている。男性の風采と衣服、女性、児童とその風習、宗教に関しては、各宗派の階級制度の骨子について述べ、また、日本人の武器、戦闘、馬匹の種類、医師、日本の書籍、紙の種類、インク、書状、船および娯楽について具体的、かつ詳細に述べている。

フロイスは、日本の家屋、庭園、絵画、建築にも言及し、信長が構築したばかりの安土城のことも記述している。屏風や盆踊りをふくめた日本の舞踊、さしみや切腹のことも叙述した。このフロイスの『日本覚書』は、日本国の政治、文化、宗教の状況を克明に、しかも広範に記録した桃山時代の文化人類学的研究の書である。

もうひとりのポルトガル人、ルイス・デ・アルメイダ(1525-84年)は、日本に西洋医学を導入し、大分で開業した。

チャールズ・ボクサーによれば、日本におけるポルトガル人の影響は想像を絶するものであった。ポルトガル人は、約一世紀の間、アジアの海上貿易を独占していた。マカオは日本との貿易の中継基地的存在だった。

日本国は、絹、火薬、陶磁器などをポルトガル人を通じて中国から輸入し、またインドや東南アジア

の香料も彼らを介して手に入れていた。ポルトガル人がもたらした自然科学のなかで、日本にもっとも影響を与えたのは、医学、天文学、航海学、それに造船方法であった。軍事に関しては、国内統一を容易にした要因のひとつである火器（鉄砲）の使用なくしては、信長と秀吉の軍事的優位性は不可能であっただろう。芸術、とくに絵画については、南蛮屏風が西洋の影響をうけたもっとも重要な遺産である。

この南蛮屏風に好んで用いられたテーマは、ポルトガル人の日本到着を描いた南蛮行列であった。そこには、貴族、黒人奴隷、珍しい動物、それに白くて大きい帆と国旗を掲げ、水夫たちが乗り組んだ濃緑色の海に停泊中の黒船が描かれている。その黒船の船底は黄金色で、松林の青さが映えている。装飾芸術や城にもポルトガルの影響がみられる。また、山の背に作られた町、長崎の都市計画も同国の影響をうけている。日本語には、当時のポルトガル語の影響をうけた多くの語彙がある。また、西洋が発祥の地である活版印刷術について言うと、ジョアン・ロドリゲスの『日本大文典』のような日本文化に関する基本的労作が世に問われたのも、この印刷術が日本に伝えられたおかげである。

16、17世紀、ポルトガルは日本に重大な影響を及ぼした。ポルトガル人を通じて、ヨーロッパ文化との接触が永遠に日本文化に刻み込まれたのである。ポルトガル語は日本と西洋を結ぶ最初の伝達手段であった。換言すれば、ポルトガル語は、16世紀においてアジアのリング＝フランカであった。

徳川幕府が打ち出した鎖国政策は、ポルトガルと日本の関係を数世紀もの間、遮断した。

ペリー提督のアメリカ艦隊の来航で、1853年から徳川政権の鎖国政策は終りを告げた。しかし、ポルトガルはもはや16世紀のような世界の帝国たる基盤をもっていなかった。

1822年にブラジルを失い、アフリカに若干の植民地を保有していたが、ポルトガルはなおも小さく貧しい国であった。

ポルトガルは、平和条約、及び1860年に締結した友好・通商条約を通じて、日本と国交を樹立した最近のヨーロッパ諸国の中の一国である。ポルトガルとの貿易のため開港されたのは、函館、神奈川、長崎の各港であった。後になって、新潟及び兵庫が開港された。ポルトガル人は、日本へ旅行ができ、居住も可能であったが、京都は禁止されていた。ポルトガルと日本の通商関係はほとんど重視されず、1859年には横浜に4名のポルトガル人が居住し、他は長崎にいた。1868年にはわずか一隻のポルトガル船が来航したにすぎない。1870年砲艦「サ・ダ・バンデイラ」号が来日した。

1880年砲艦「マンドヴィ」号、「リオ・リマ」号、「テジョ」号が来日した。当時50人から60人のポルトガル人が日本に居住し、その半数が横浜にいた。そこにはクラブがあり、ポルトガル語新聞「アルグス」紙が発行されていた。そして1887年、他の通商条約が締結された。

19世紀末葉、著名なポルトガル人作家ウエンセスラウ・デ・モラエス（1854－1929年）は、日本にその生涯と作品を捧げた。モラエスの生涯は、東洋文明にひたりきって生きた西洋人のきわめて特殊な例であり、その生涯で彼は、ヨーロッパと東洋の価値感をより調和よく合成した。

モラエスは海軍士官であった。1889年、初めて長崎に入港し、日本の風光に魅了された。1893年自分が勤務しているマカオ港のための大砲購入にあたり、1897年、マカオ総督の随行員のひとりとして、京都を訪れ、明治天皇に拝謁した。

1898年、神戸・大阪ポルトガル領事館の職務代行事務官に就任。翌年に神戸領事館の領事に任命される。モラエスの生涯にとって、この神戸の領事時代はもっとも幸せなころであった。1913年領事を辞め、四国の徳島に赴き、1929年に他界するまでそこに居を定めた。

日本は、モラエスの文学的才能をめざまさせた。彼の東洋における初期の作品には、熱意と豊かな色彩、明るい魅力が満ちあふれている。

日本に対する熱狂ぶりは、直ちにモラエスの重要な処女作『極東遊記』（1895年）で示された。「日本への郷愁」と題された章でモラエスは、長崎への愛をたかめ、横浜が国際化しているのに失望した。娘たちに魅了され、着物と帯の色彩を賛美した。モラエスは、通りを散歩しながら日本人を観察して人力車、物売り、僧侶たちのことを回想した。店先では、きらびやかな色の繊細な絹や、銅器、磁器を絶賛した。日本芸術に感動し、モラエスにしてみれば、日本芸術は、感嘆すべき、我慢強い、繊細な芸術であって、非常に感激した。また、日本の版画や書籍のうつくしさに魅了された。モラエスは、日本の自然の崇高さに心打たれ、日本の芸術について熟筆をふるった。当時モラエスは、エドモン・ド・ゴンクール『歌麿』についての著書を読んだ。夜、吉原をさまよいながら、江戸時代を偲んだ。そして次のように書き残している。「歌麿は日常の雑多な家事のなかや、庭、通り、田野での女性についての描写を残しているが、それはすべての面で芸術性に豊んだすばらしい作品であった。」また、モラエスは吉原の娼婦たちの世界を想ったりした。

日本の家屋はモラエスを魅了した。畳と木、それに紙でつくられているのに感心した。茶屋では、三味線を聞くのを好み、寿司を食べたり、女中たちとしゃべったりした。

モラエスは極端に官能的な男で、女性のうつくしさをこよなく理解し、日本女性をとくに好んだ。それゆえ、吉原ものを絶賛し、夜の散策で、吉原というところは、詩人や芸術家たちに感銘を与える場所だ、と考えた。

しかし、モラエスは（吉原以外にも）芸術性のある田園や名所を訪れた。そして、鎌倉、江の島、箱根溪谷、それに田園風景、深淵、日光の神聖な社などを記述している。「日光は神聖な土地で、丹念に造られた社や高貴な人の墓があり、大木が生い茂り、丘陵が広がり、坂と小川と滝、それに赤いうし塗りの橋がある。」

モラエスは、（土着民のかつぐ輿にあたる）駕籠のかつぐ男たちを描いた。かごには、娘たちが背もたれして乗っている。ごさを負った巡礼者たちも数人描いた。そして徳川家康、家光両将軍の墓の威厳に感動した。

モラエスは伝統のある日本を墮落させている外国の影響を歎惜し、「かの聖なる日光の壮厳きわまる調和」に共感した。「僕たちにお勤めの時を知らせる巨鐘のとどろきに時折まじり、偉大な死者たちの霊をここ日光に日夜静める樹々のざわめき、山の斜面に見られるもの悲しさ、虫たちのさざめき、さらに蟬時雨などがかもしだす永遠のひびきが、はっきりとありがたく私の耳に聞こえてくる。」とも書いている。

モラエスは、横浜から大阪へ汽車旅行して、その情景をこう描いた。「緑の野原、みごとな菜園、稲田、松林、竹林、地平線にくっきりとあざやかな富士山の輪郭。」中国の村落とくらべて日本のその清潔さに注目し、停車駅で食べた弁当を観察し、子供たちの愛らしさも記録した。

彼は大阪をたたえ、中之島界限でくらしした。そして、大阪城や大阪の家並み、寺院を描いた。ラフカディオ・ハーンのようにモラエスは、大阪の町が気に入っていた。京都へ行った。汽車で2時間の旅。京都では人力車で、たくさんの寺を一気に回った。奈良で大仏を見て、堺へも行った。モラエスは夏の夜の大阪を散策するのを好み、灯火きらめく街でレストランや群衆を観察し、魅了された。「日本とい

う存在が次第に遠ざかり、今世紀の悲しい暗黒の世界にバラ色の夜明けを告げてくれるような幸福な国、日本よ。」と言った。そして江戸時代の日本を高揚した。「この時代には、信仰心に対する情熱があり、偉人を崇拜し、各自の主に族長的情愛があった。」と。

モラエスは過去を理想化し、近代化を軽蔑し、過去の宗教と日本の伝統を賛美した。このことはハーソンも同じであったが……。

瀬戸内海の山々や緑なす島々の美しさ、長崎の絵のような美しさ、この世ならぬ日光の壮厳さ、吉原の快楽、日本の民間説話、歌麿の絵は、モラエスを悩殺し魅了した。モラエスにとって、日本はファンタスティックな装飾の国であり、花の国、美女の国、浮いた恋の国であった。

『大日本』（1897年）は、大航海時代以降、ポルトガルで刊行された最大の旅行記で、ポルトガル語で書かれた偉大な散文のうちの一冊である。

音楽的な散文のなかで、モラエスは日本史の概略を紹介し、日本の伝統文化を述べた。また、信長、秀吉、家康ら日本を統一した武将を称賛した。日本の鎖国とキリスト教の弾圧政策を是とした。日本の独立と日本文化を保持するためであったからである。また残りの何章かを日本の芸術と日本の生活に紙幅をさいている。モラエスは日本芸術のほとんどすべてに賛辞を与えている。掛物、巻物、歌麿、北斎の絵画、陶磁器、土器、漆器、七宝、根付、奈良と鎌倉の大仏、武器や建築などである。しかし、伝統的な演劇についてはほとんど述べていない。浮世絵の大家については、感動で声もふるえんばかりの調子で記述している。伊万里焼、九谷焼さらに薩摩の陶器をも高く評価した。また、宗教建築、死者への崇拜、家屋、庭園についても述べている。モラエスは、ヨーロッパの功利主義の流入によって、日本国民のすばらしい芸術的独創性が墮落しているのを嘆いている。当時日本は、ヨーロッパとアメリカ合衆国向けに、教養のない外国人たちの趣味を満足させるため、芸術的価値のほとんどない品物を多く輸出していた。モラエスは、また日本人の精神面も嘆いた。日本人を西洋の目新しいものの模写に向かわせる精神の浅薄さを指摘した。これは、ラフカディオ・ハーンのテーマにも共通するものである。両作家とも、日本の性急な西洋化を軽蔑していたからである。

モラエスの古きよき日本への熱狂ぶりは、京都の寺院、日光の神聖な橋への称賛、古い庭園への興味、旧式の城の記述からもうかがえる。

モラエスには、日本にポルトガルの影響がほとんど残っていないのがわかっていて、「ポルトガルの影響は、この日出づる帝国では終りを告げた。不毛の地、疫病の地、野蛮な地できびしく不当に扱われ、そうしたいくつもの地を苦勞して通ってきた大胆な船乗たちの目には、日本はすばらしい国に映ったにちがいない。その上、フェルナン・メンデス・ピントの熱狂的な記述、今日もお旅行者をひきつけてやまない快適な魅力を表現している他の作家たちの物語、日本の情景は楽園の心地よいものだとし、イヴの末裔への遺産だとする魅力的な物語などから、彼らの目には日本はすばらしい国に映ったのである。」

モラエスは続いて日本の生活について述べている。日本女性を、世界中でもっとも優雅な女性だとみなしている。モラエスは、彼女たちを日本庭園で観察した。「日本庭園では、娘たちが池の中の金魚にえさを与え、のどかな水面に愛情を込めた視線を投げかけ、あちこちに飛ぶ蝶にほほえみを浮かべながら、異国風の花ざかりに見とれていた。」また、大衆浴場のことにふれ、横浜と大阪での経験を思い出した。道頓堀を散策しては、劇場に通い、夏の夜に輝く何千もの灯火、盛んな見せ物、日本人の酒好き、人力車や、行商人が売声あげて通っていくのに入らした。

モラエスはうどんを食べ、お気に入りのキリンビールを飲んだ。日本の生活は街頭にこそ見い出せると考えた。東京では浅草界隈を好んだ。モラエスは、陽気な絵画のなかにある暗い影を感じていた。長崎、横浜、神戸といった外国人に開放され諸港については、少なからぬ混血児を描いてあったからである。

モラエスは、日本の風景に夢中になっていた。水平線の純粋な青さ、杉でおおわれた山々、^{せみしぐれ}蝉時雨、水面にかがやく月光などを思い出した。山々を描いた。「土手の隆起したところは、樹液をたっぷりと含んだ森林がひろがる。美しい竹林や松林、杉林など。」と。モラエスは詩人の目で日本の農村風景を見つめている。「このほれほれとする農地、ここで人びとは災害をこうむらず、涙することもない。この土地で永遠に変わることのない魅力ある風景のなかで、木と紙で出来た小さな家の平穏さのなかで生きることを私はどんなに切望することか！喪服を着た縁起の悪い行列なんかをせずに、人知れず、蝉が永遠の賛歌をかなでる竹林の陰で、いつまでも眠りながら地に帰ることを私はどんなに願っていることか！…」とモラエスは叫んだ。

モラエスは、湖のほりにある宿屋から宿屋、茶屋から茶屋をさまよった。彼は、箱根と日光の湖畔を知っていたし、琵琶湖周辺の地を散策した。

モラエスのこれにつづく諸作は、初期の我を忘れた時の印象からもっと冷静なオーケストレーションを成している。『茶の湯』（1905年）では、宇治の茶づくりを描き、茶の湯の起源を追想している。

『日本通信』（1907年）では、東郷、伊藤、乃木将軍、日本人のアジアにおける使命について賛美を与えている。『シナ・日本風物誌』（1906年）では、城崎、松島それに天の橋立の情景を述べ、再び京都を訪れ、桃山、嵐山、円山、吉野について語っている。また梅、桃の開花も語り、月明に映える^{せみしぐれ}祇園の満開の桜を夢うつつに思い出している。日本の動植物を観察し、菊、椿、烏、黒い蝶、蛍、^{せみしぐれ}蝉時雨や夏の夜にすだくコオロギ、何種類ものカエル、鶴、亀などのことを書き、またも有頂天となる。「おお、日本の風景よ！それは何と魅力的で新鮮で、神秘的で楽園のような風景だろう。かの地ヨーロッパで、日本の存在を不快なものにしている、ペールにおおわれた偏見を除く考え方が、（穏やかで、愛情のこもった考え方）、ここ日本でようやく広まりはじめているようだ！」

モラエスは息苦しい暑さにもかかわらず、日本の夏を楽しんだ。日本が最高に美しくなるのは、この夏のころだからである。大地は青々とし、朝顔がひらき、水面には蓮が浮かんでいる。それは巡礼のころであった。秋には紅葉を觀賞し、冬は雪景色を味わった。彼は日本の魅力を強調した。「これほど私が熟知した土地はなく、これほど知りつくしている土地はない。この点から、この土地以上に魅せられた土地はない。また、人びとの性格や習慣、芸術的な精神から、この国民ほど興味深い国民はない。そのうえ、この国の娘たちほど情の深い女性はいない。つまり、世界で日本人ほど幸福な者はいない。それらがすべてを物語っている。」

モラエスは、日本の民間伝承にも興味を示した。人魚、一寸法師、浦島太郎、その他の物語のことも述べている。

晩年、モラエスは一日本人として徳島の家でくらし。その家には、明治天皇の写真、天照大御神のお札、北斎の絵、仏像などが飾られていた。モラエスは日本食しか食べなかった。日本語はマスターできなかったが、日本語がメロディーに富み、表現力に富んだ言語であることはわかっていた。

『徳島の盆踊り』（1916年）という日記で、モラエスは1915年夏の猛暑、蚊、寺院、四国巡礼、

熱狂的に明るい阿波踊りなどを想起している。また彼は、死ということにも取りつかれていた。自分が愛した二人の女性の墓にもうで、彼女らへの思いを、1923年刊行で最後の重要作品『おヨネと小春』に託した。この本のなかでモラエスは、仏と観音を称賛し、死人を礼賛した。日本はモラエスにとって郷愁という宗教の祭壇となった。

『日本史瞥見』(1924年)、『日本精神瞥見』(1925年)のなかで、彼は日本の芸術、風習、景観を紹介し、仏教、神道についての信仰のこともその概略を述べた。『日本の夕べ』(1926年)で、有馬、高雄、清水寺、箕面などを紹介した。1881年に自害した畠山勇子を賛美し、京都の末慶寺にある彼女の墓にもうでたりした。

晩年のモラエスは、日本の庶民に親しみを覚えたと述べており、大正時代の社会問題についての見識も表している。動物好きで、徳島の家には、虫、魚、猫、亀、(ウグイスやメジロ)などの小鳥を飼って集めていた。自然を愛し、創造物のすばらしさを好んだ。岩石の美しさを述べ、海の貝から、貨幣なども収集していた。

日本生活の初期、モラエスは異国情緒のある日本の魅力を賛美し、絵画のように美しく色彩ある日本をほめたたえた。モラエスの日本を見る目は非常に上滑りであったが、晩年にその洞察力はより深いものとなり、うどんの行商人や按摩のような東洋人の生活の本質的なものや、民衆のさまざまな特徴に興味を示した。フランス語と英語の訳本で日本の古典文学を読み、宗教を学んだ。芭蕉の作品を研究し、その詩を翻訳しようとした。

1921年の書簡に、モラエスは次のように書いている。「作家とは、自己の精神をみがき、ある目新しいものを自分が理解できる力を養うために、筆をとるときは書こうとする対象に全精神を捧げなければならない。また、自分の作品を読んでくれるすべての読者を感動させるには、全神経を集中しなければならない。」とした。1922年、他の書簡では、ラフカディオ・ハーンの商品について触れ、「ラフカディオ・ハーンという人物を少しでも知ろうとするなら、私がしてきたのと同じ生き方をする必要が絶対に必要である。30年近く日本に住み、日本の生活に可能な限り入りこみ、彼らとともに暮らし、幾千もの幻想に悩殺され、ついには苦しみを重ねて日本で死んでいくほどにのめり込まねばならない。」と語った。

限界はあるが、ウェンセスラウ・デ・モラエスは、ポルトガル文学史上、もっとも独創性のある作家のひとりである。彼は、フェルナン・メンデス・ピントの継承者であり、ピントの『遍歴記』を、ある時は酷暑、ある時は極寒の孤独で長い徳島で、夜ごと、ひとりじっくり読んだのである。

前ポルトガル大使、アルマンド・マルチンス・ジャネイラ氏の言をかりれば、モラエスは、「ポルトガル最後の偉大な冒険家」である。

約言すればモラエスは、遠隔の国々への紀行文学の発展に支配されたポルトガル文化の伝統的異国趣味最後の偉大な代表者である。